

# 日本・メキシコ政府交換留学50年の軌跡と課題

田中 京子<sup>i</sup>・星野 晶成<sup>i</sup>・新見 有紀子<sup>ii</sup>・  
ペディ フランシス<sup>iii</sup>・落合 一泰<sup>iv</sup>

## 要 旨

日本とメキシコの間には政府交換留学制度があり、両国の外交上の取組として、1971年から現在まで継続されている。修了生は両国合わせて5千名近くに上り、両国の学术交流や友好への影響は大きい。

日本もメキシコもこの50年間に、経済危機や大自然災害など国難とも言える状況を経験し、政権交代もあった。その中で日墨交換留学制度がほぼ途切れることなく続けられてきた背景にはどんな要因があるのか、世界に5千名近くいる修了生たちは、留学を通して何を得て、その留学成果はどのように現在に繋がっているのか。

筆者たちは本制度の長期的な成果を多角的に検討するためにメキシコ側研究者たちとともに国際共同研究を始めた。本稿ではこれまでの文献調査およびアンケート調査から明らかになった制度の歴史や特徴の概要を報告し、今後調査を進めるにあたっての課題をまとめた。

## キーワード

日墨 政府交換留学 元留学生 文化外交 留学成果

## 目 次

1. はじめに
2. 日墨交換留学制度の概要と特徴

- (1) 制度のシンボル性と先見性
  - (2) 制度発足の経緯
  - (3) 制度の特徴
  - (4) 制度の変化
  - (5) 制度のフォローアップ
3. 日墨交換留学制度の留学成果と二国間交流への影響：調査の意義と目的
  4. 今後の課題

## 1. はじめに

日本とメキシコの間には、長年にわたって実施されている政府交換留学制度があり、両国の外交上の取組として1971年から50年以上継続されている。(発足当時の正式名称は「日墨<sup>1</sup>研修生・学生等交流計画」で、2010年に「日墨戦略的グローバルパートナーシップ研修計画」と改称された。本稿では「日墨交換留学制度」と記す。)これまでの修了生は両国合わせて5千名近くに上り、両国の学术交流や友好への影響は大きい。日本において、二国間でこのように長期間にわたって続いている留学制度はアメリカとのフルブライト留学制度以外にはなく、また参加人数も制度発足後10年間以上はそれぞれの国から約100名ずつ、そして現在は約50名ずつがお互いの国に渡航するという、二国間交換留学としては大きな規模で行われている。

日本もメキシコもこの50年間で、経済危機や大自然災害など国難とも言える状況を経験し、無論、幾度も政権が交代している。その中で日墨交換留学制度がほ

<sup>i</sup> 名古屋大学グローバル・エンゲージメントセンター 旧国際機構 国際教育交流センター

<sup>ii</sup> 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター

<sup>iii</sup> 名古屋大学 国際開発研究科

<sup>iv</sup> 明星大学 明星教育センター

<sup>1</sup> メキシコは漢字で「墨西哥」と書かれ、「墨」と略される。

ほ途切れることなく続けられてきた<sup>2</sup>背景にはどんな要因があるのだろうか。また、世界に5千名近くいる修了生たちは、留学を通して何を心得、今何を思っているのだろうか。留学成果はどのように現在に繋がっているであろうか。

本稿では、日墨交換留学制度の発展経緯と制度内容を概観した上で、同制度が参加者に与えた影響や二国間外交に及ぼした影響が検証されていないことを指摘し、この効果検証のために筆者らが取り組んでいる調査の現状と今後の課題を報告する。

## 2. 日墨交換留学制度の概要と特徴

### (1) 制度のシンボル性と先見性

日本とメキシコの間には、遡ること1609年にメキシコ（当時のヌエバ・エスパーニャ）船が千葉県御宿に漂着し遭難者300余名と町民や江戸幕府が交流したこと、また19世紀末からは多くの日本人がメキシコに殖民し現地の人々と交流しながら定住したこと、そして20世紀半ばからは活発な経済・文化交流が行われてきたことなど、長年にわたる交流の歴史がある（林屋1999:4, JICA 2000:84など）。日墨交換留学制度は、その豊かな友好関係の土壌の上に1971年に発足した。本制度は、両国交流の歴史を語るうえで欠かせない「シンボリック事業」（滝本 2001a:23）であり、様々な変化を遂げながら現在まで50年以上続いている。

また、世界の高等教育機関では国際化の重要性が叫ばれて久しく、各国・地域で留学生交流も活発化している。経済基盤や教育環境がより整った国へ向かうこれまでの伝統的な留学の流れとは異なる動きが、近年活発になっており、星野（2020:10）は、日本における「グローバル人材」推進の流れの中で、日本の大学から ASEAN 地域といった非伝統的な地域への短期間の留学が増加していると指摘している。関連して所（2019:24）は、「大学生の留学先として非英語圏・非欧米圏の選択肢が徐々に増えている現在、半世紀ほど前から続く日墨交換留学制度の先見性の高さと同様性へ

の志向に改めて驚かされる」と述べている。

### (2) 制度発足の経緯

前述のように、日本とメキシコの間には17世紀初頭より友好的な関係があり、経済・文化交流も良好な形で継続されていた。第二次世界大戦後、日本は1967年には世界第二の経済大国となり、メキシコも工業化や技術発展を求める時代に入っていた。世界的な学生運動の高まりの中、メキシコでは1968年、政府の弾圧により数百名ともいわれる学生たちが命を落とすという大事件<sup>3</sup>があった。当時の内務大臣、1970年からは大統領になったエチェベリア氏(Luiz Echeverría Álvarez)は、以前から大の親日家であり<sup>4</sup>、特に日本の急速な工業発展や日本人の勤勉さに敬意を持っていたことから、メキシコの若者世代の要求を新たな方向に繋ぐべく、若者たちが日本から学ぶことを期待した。そこで日本との大規模な交換留学制度を提案し、これに日本側が応える形で、各国から100名ずつを交換するという日墨交換留学制度が1971年に始まった<sup>5</sup>。

メキシコ側にとっては日本の高い技術や経済発展から学ぶ機会であり、日本側にとっても、スペイン語圏との人的交流を通して、天然資源が豊かなメキシコやラテンアメリカ諸国との関係を緊密にすることは重要であったため、この計画は、発案から10カ月という短い期間で現実のものとなった。当時毎日新聞の記者であった滝本（滝本 2001a:10）は、エチェベリア大統領の指導力・実行力と、日本の外務省や留学生受入に協力した経団連、各企業の決断力を高く評価している。日本側での立役者、在メキシコ日本大使館付属日本研究センターのセンター長であった林屋栄吉氏の述懐によると（日墨交流会 1996:2-5）、日本から推薦する日本人留学生第一期生100名のうち27名が女性であったことについて、日本側は「こんなに苦勞した計画を、女性が遊び半分に利用されてはかなわない。彼女達はどうせ結婚するのだから日墨関係の将来のためには何の役にも立たない。」と心配してメキシコ側に伝えたところ、「どうして女性が多くてはいけないのか」とメキ

<sup>2</sup> 1986年に一回停止された、メキシコの経済危機や前年の大地震などの理由からと言われているが、詳細は明らかではない。また、2020年2月以降は世界的な新型コロナウイルス感染症の影響で中止あるいは一部オンラインでの実施となっている。

<sup>3</sup> トラテロルコの大虐殺と呼ばれ、メキシコ現代史上の大きな事件となっている。

<sup>4</sup> 内務大臣になる以前の1963年に日本人数名を自宅にホームステイさせていた時期があり、その一人であった滝本（2001a:10）が当時の思い出を記録に残している。

<sup>5</sup> 外交上の経緯については、前述の林屋氏が、当事者として詳細に述懐している（日墨交流会 1996）。

シコ側から反問されたという。「彼女たちが企業に就職しなくても、またスペイン語関係の仕事につかないで帰国後直ぐに結婚しても少しも構わない。」「子どもにお母さんは若い時メキシコに行っていた。とても楽しい所だったと話してくれるだけでもこの計画の目的は達せられるのだ」との答えが返ってきたことから、両国のビジョンの違いがよくわかる出来事だったという。

本制度は、発足当初から、各政府が相手国留学生の渡航費や生活費を負担するという互惠関係に基づく文化外交制度であった。交換人数が減少した時期を経て、1986年に一度、交換は停止となった。その後、交換は継続されたものの、定員削減や留学先都市の変更なども経験した。さらに、本制度は、日本では途上国援助の意味合いもあってODA 予算で運用されていたが(林屋 1999:5, JICA 2000)、メキシコが目覚ましい経済発展を遂げたことで、2010年には、より戦略的なグローバルパートナーシップを意識した制度として生まれ変わった。

### (3) 制度の特徴

日本が諸外国との間で行っている数多くの交換留学制度の中で、日墨交換留学制度は次のような際立った特徴があると言える。

- ①継続性：50年以上に渡って継続されている。同様に長く続いている留学制度は、日本ではフルブライト制度<sup>6</sup>の他にはない。
- ②交換人数の多さ：発足後10年以上はそれぞれの国から約100名、その後約20名に減少した時期もあったが、現在は50名規模で行われ、これまでにこの制度を利用した修了生は、両国合わせて5千名近くになっている。
- ③二国間外交の中で発足し、運用されていること：一国の大統領の発案で両国政府が迅速に交渉し、制度が発足した。それぞれの国の外務省が所掌し、運用はその外郭団体や両国大使館等が行っている。大学

間または文部科学省や経済産業省が所掌している他の留学制度とは性格を異にしている。

- ④留学先が、両国にとって非伝統的な留学先国であること：メキシコ人にとっては隣国アメリカや文化的共通性の高いスペインなどが一般的な留学先であり、日本人にとっても西欧諸国、特に英語圏が、留学先としては一般的である<sup>7</sup>ことから、メキシコ、日本という留学先は希少性があると言える。
- ⑤研修内容が二国間で大きく異なっていること：各国の必要性に沿った研修を行っており、メキシコにとってはより技術研修の意味合いが強く、日本にとってはより言語・文化習得や研究の意味合いが強い。
- ⑥社会人の参加が多いこと：日本からは学生、社会人が約半数ずつ参加し、メキシコからは社会人が参加している。これは前記の、各国の必要性とも関連する特徴である。

### (4) 制度の変化

日墨交換留学制度の50年の歴史の中には主に、下記のような変化があった。

- ①運営機関：時代を通して両国の外務省が所掌するも、運営機関には変化があった。発足後長年、日本側では国際協力機構(JICA: Japan International Cooperation Agency)<sup>8</sup>が、在メキシコ日本大使館<sup>9</sup>との協力により、またメキシコ側では、CONACYT: Consejo Nacional de Ciencia y Tecnología(メキシコ国家科学技術審議会)が運営を担当してきた。2010年以降、両国の新たなニーズを反映すべく、制度の名称が「日墨戦略的グローバルパートナーシップ研修計画」と改められて、英語で行う短期留学(2週間から2か月)と長期留学(8か月以上)が設けられたが、日本での受け入れは短期・長期ともJICAが、メキシコでの受け入れは、短期はAMEXID: Agencia Mexicana de Cooperación Internacional para Desarrollo(メキシコ国際開発協力庁)、長期は

<sup>6</sup> フルブライト教育交流計画は1946年に発足し、日米間では1952年に開始した。50周年の2002年までに、日米間で8千人を超える交流が実現したという。(賀来景英他(2002:v))

<sup>7</sup> 星野(2020:2)によると、近年は日本人のASEAN諸国(英語圏以外の国も含む)への留学人数が大きく増加しており、そこには大学側、学生側ともに以前とは異なる要因があるという。

<sup>8</sup> 2003年までは「国際協力事業団」(JICA)、1974年以前は「海外技術協力事業団」OCTA: Overseas Technical Cooperation Agency。

<sup>9</sup> 在メキシコ日本大使館の中では、2001年頃までは経済班が、以降は文化班が担当している。(2019年、当大使館における聞き取り調査による。)

CONACYT が担当している。

- ②交換人数：1971年発足時は、両国から約100名ずつが参加したが、1983から激減し、1985年のメキシコ地震の年は、30名弱となった。1985年の日本からの留学生は9月出発の予定が大幅に遅れ、日本側が往路費用を立て替えて11月に出発したという当事者の証言がある<sup>10</sup>が、実際定員が減らされていたのか、定員に対して参加希望者が少なかったかは、明らかではない。1986年には、制度発足以来初めて、交換が停止された。停止の理由については世界的な経済危機や前年のメキシコ地震の影響のほかに、政府間調整の不調や、メキシコ人にとっての日本への適応の難しさ（Uscanga 2012:9）などが推測されている。一方林屋は、日本側のメキシコに対する認識が遅れており、停止の理由の「根底には（メキシコ側に）日本の受入体制に不満があったことが大きく影響していたと思う」と述べている（日墨交流会 1996:5）。その後1995年からは、定員を30名ずつにし、2010年からは短期（2週間から2カ月）・長期（8カ月以上）合わせて50名ずつを交換している。
- ③研修分野：制度発足の1971年当初は、日本側ではメキシコ人留学生に電気通信、電子工学、重・軽電器産業、精密力学、工業・農業機械、金属工学、石油化学、地震工学など多分野に渡る研修（Uscanga 2012:8）を多くの企業で提供した。メキシコ側の必要性や日本側の受入れ態勢によって、日本での研修内容は変化し、近年ではコンピュータ、情報、ロボット工学などにもシフトしているが、品質管理や生産性といった産業工学は引き続き提供している（Fraga 2020:39）。一方メキシコ側では、国内複数都市の国立・州立大学でスペイン語やメキシコ・ラテンアメリカの歴史・文学・人類学等の研修を提供している。一定の条件を満たす者には、関係機関での専門研修やインターンシップも行っている（外務省 2010）。2010年以降の短期プログラムにおいては、防災、知的財産権、リスク管理などの分野において、プロジェクトベースで研修を行っている。
- ④派遣先：日本側では、OCTA（1974からはJICA）および国内の多数の企業で受入を行っていた。その

後、大学での研修も取り入れられた。一方メキシコ側では大都市・中都市の国立・州立大学を中心に受け入れていた<sup>11</sup>が、2010年以降は、スペイン語研修はメキシコシティーにあるメキシコ国立自治大学でのスペイン語研修に限定し、その後各人の専門の研究や研修に適した場所に派遣されている。

- ⑤滞在形態：制度の発足時、メキシコでは、日本人留学生が現地の生活についての知識を深められるよう、各都市でホームステイすることを基本にしていた。ホームステイ先の選定や環境整備にも関係者が努力したという記録がある（日墨交流会 1996:4）。田中（2004a:6）では、元留学生たちにとって、ホームステイでの家族との交流が、メキシコ留学経験への高い満足度に大きく影響しているという。しかし、元留学生たちからの報告によると、その後、自ら部屋探しをする時期や、日本留学経験者が部屋探しのサポートをする時期があった。日本では、メキシコ人研修生はJICAの研修所で日本語研修を受け、その後それぞれの研修地域の研修所等に宿泊している。
- ⑥その他：元研修生たちの報告によると、時期によって「留学中はその国から出国することができない」とか「スペイン語の到達度試験で合格しないと、翌月の奨学金が停止になる」「毎月受入機関にレポートを提出する」など異なる方針や規則があり、各時代、各国で様々な工夫がされてきたようである。同じ時期であっても、スペイン語を日本人留学生だけで学んでいた都市、他の外国人留学生とともに学んでいた都市など、留学先によっても環境が異なっていた。

## (5) 制度のフォローアップ

### ①主催者・運営者によるフォローアップ

1977年、1979年、2000年にJICA担当者がメキシコに赴き、メキシコ関係者や元留学生に聞き取りを行うという巡回調査が行われている。1977年の巡回調査（JICA 1977）では、両国の技術格差や修了生フォローアップの欠如など、運営上の課題があげられてはいるものの、解決に向けて両国が努力する向きが見られた

<sup>10</sup> 当時の参加者からの電子メールでの情報提供（2022年1月）による。

<sup>11</sup> 高山（2011）によると、第1期生の研修先は、メキシコ国立自治大学（UNAM）、コレヒオ・デ・メヒコ（メキシコ大学院大学）、国立人類学歴史学学校、グアダハラハラ州立大学、グアナフアト州立大学、オアハカ州立大学、ベラクルス州立大学、および特殊研修として財団や会社があった。



が、1979年の調査 (JICA 1980) においては、日本側で大人数のメキシコ人研修生に対して適切な研修先を見つけるのが難しいことや、受け入れ期間が長すぎることも、また、受け入れ企業の負担も、両国事務担当者の負担も大きすぎるなど多くの課題を指摘している。そして本制度は問題が大きいため「その存続をも含め、真剣な見直しが重要である」としている。その約10年後の2000年の調査 (JICA 2001) においては、相互主義とはいえ、両国で目的の異なる研修を、人数や期間を固定して行っていることが問題であるとし、「外交レベルによる本計画の抜本的な見直し」の必要性が強調されている。これらはあくまでも日本側の記録であり、メキシコ側がどのような課題を感じていたかはわからない。

制度の発足から約10年で、運営上多くの課題が浮かび上がり、しかしその後日本側もメキシコ側も経済危機や自然災害などを経験し、制度を本格的に改善する余裕がないまま、かといって完全に途絶えさせることなく、継続してきたことが窺える。そして2010年に、抜本的な見直しが現実のものとなった。

## ②同窓会の活動

メキシコ人元留学生は、互いの結束およびメキシコと日本の文化・科学交流促進を目的として1978年に ASEMEJA (Asociación de Exbecarios de México en Japón) を設立し、JICA メキシコと協力してセミナーやイベントなどを開催し、1994年からは機関誌 Tsuru を発行している。会員は日墨交換留学制度以外の JICA プログラム研修生も含んでいる。日本では1994年に、元留学生同士の親睦とメキシコやラテンアメリカ諸国との友好親善を目的として「日墨交流会」が発足し、駐日メキシコ大使館と協力してセミナーやイベント、派遣留学生の壮行会などを催し、1995年からは機関誌 Águila y Sol を発行している。また2000年には、制度30周年記念として関係各組織と協力し、エチエベリア元大統領の訪日や大同窓会を実現させている。両同窓会とも機関誌とともにウェブページを持ち、活発に発信している。

Peddie (2022) は、両国の同窓会ニュースレターに掲載されている記事の内容をカテゴリー化し、留学成果を portability (可搬性)、dependability (信頼性)、sustainability (持続可能性) の観点から考察した。両国組織が取り上げるテーマを比較した結果、日本人元留学生はメキシコやラテンアメリカの文化的側面を、

メキシコ人元留学生は科学技術面を中心的に取り上げていること、留学成果は portability, dependability, sustainability の面で十分に活かされていること、またメキシコ人元留学生会は JICA と繋がりを持つことで、留学成果により一貫した持続性を保っているのではないかと述べている。

## 3. 日墨交換留学制度の留学成果と二国間交流への影響：調査の意義と目的

この制度についての概説や考察は、林屋 (日墨交流会:1996)、滝本 (2001a,b)、高山 (2011a,b)、Uscanga (2012, 2016)、Ochiai (2018)、所 (2019)、などによって行われており、留学成果についても、日本側では田中 (2004a) が、またメキシコ側では Uscanga (2012, 2016) と Fraga (2020) が、資料あるいはアンケートやインタビューを通して一定の調査結果を報告している。

田中 (2004) は129名の日本人元留学生へのアンケート調査をもとに、留学による視野の広がりや価値観の変化といった個人としての成長、メキシコやラテンアメリカについての知識や経験の伝播、仕事上での知識や能力の活用などを留学成果としてまとめ、成果は「人材」を育てるのは異なりすぐに形として見えるものではないが、「時間をかけて影響を与える大きな力になる可能性がある」と述べている。

また Uscanga (2012:7-9) は、メキシコ側の外交史料も参照して日墨交換留学制度発足の背景や変化の概要をまとめ、日本人は研究や教育を通してメキシコやラテンアメリカの政治・学術面の発展と知識・経験の伝播に寄与している元留学生が多いが、メキシコ人の場合は留学後自らの職業を継続する中で、世代を超えての留学成果の伝播は限定的で、日本での留学経験は「よい思い出」になってしまったのではないかと述べている。さらに Fraga (2020) は、メキシコにおける国際学術交流の変遷を調査し、メキシコ人元研修生9名と関係者10数名にインタビュー調査を行い、留学後の組織的なフォローアップや、性別による制度利用の比較、日墨双方向の留学成果の比較などさらなる調査の必要性を提示している。

一方、日本人の海外留学によるインパクトに関する研究として、横田他 (2018:43) が、留学経験者4,500名以上と留学未経験者1,500名近くへのアンケート調査を

通して、海外留学は日本人学生たちに、前向きな価値観の醸成、語学力、専門性の向上、社会人としての基礎力の形成などのインパクトを与えたことを明らかにした。しかし、本分析対象データは、米国を中心とする伝統的な留学先への留学経験者が中心であった。今後は「留学時期別、留学先国別のインパクトの違い」についてさらなる検証が必要だとしている。

長年継続されてきた本制度に関しては、一定の調査結果が出ているものの、日本・メキシコ各時代の社会的背景や、様々な制度内容の変化が留学成果に与えた影響、また両国間での留学成果の比較、両国ならでの成果の特徴などについての検討はこれまでされていない。50年が経過した現在、長期的な留学成果についてより詳細に検証すべき時期であると言える。

日墨交換留学制度の参加者たちに特化した形での留学経験の長期的インパクトを探るべく、筆者たちはメキシコ側研究者<sup>12</sup>たちとともに、国際共同研究を始めている<sup>13</sup>。具体的には、日本とメキシコ、およびその他の国に居住する本制度に参加した留学生4,400名のうち把握可能なものに対して、留学経験の長期的インパクトを探るための質問紙・ウェブを利用した悉皆調査を行なっている。現時点では、メキシコ人元留学生106名、日本人元留学生128名が調査に参加しており、その量的データの分析をそれぞれ行なっている。また、日本側調査団のうち3名が2019年にメキシコに赴き、メキシコ側の協力を得て関係機関を訪問し、日墨交換留学制度のメキシコ側での経緯や現状について聞き取りし、資料等を閲覧している。さらに、日本側では、悉皆調査に参加してくれた日本人元留学生のうち15人に対して個別にインタビューし、質問紙の回答内容から掘り下げて留学経験やそのインパクトを聞き取っている。質問紙による量的データとインタビューによる質的データ両方を照らし合わせながら、今後この分析を進めていく予定である。この分析結果を、メキシコ側調査団と比較し、2022年以降に、国際学会等で発表し、最終的には文献として残していくことを検討している。

#### 4. 今後の課題

これまで概観したように、日墨交換留学制度は、日本における留学制度の中で際立った特徴がある。時代により、活性化したり停滞したりしながら現在まで継続されてきたが、制度変化の詳細やその背景については未だ十分に調査されておらず、留学成果の特徴や比較についても今後の課題となっている。データ収集や分析を進めている一方で、以下に今後の主要な課題を記す。

- ①50年間の制度の変化について、第一次資料を収集する。これまでの筆者たちによる調査によると、日本の国会図書館や外交史料館、両国大使館、JICAなどの関係諸機関には、特に発足後30年間ぐらいの第一次資料の蓄積がほとんどないようである。同窓生等によびかけて、各時代の募集要項など第一次資料を収集することが必要かもしれない。それには様々な調整が必要である。
- ②現在国際共同研究として進めている元留学生へのアンケート・インタビュー調査の分析により、元留学生が留学経験を通して何を感じどのように変化したか、現在どう感じているか、留学経験をこれまでの生活でどのように活かし、周りや次世代に伝えているか、ひいては両国の友好関係にどのように影響しているかを量的・質的分析を統合させて詳細に検証する。日本人の他の国々への留学との比較や、メキシコ人の留学成果と日本人の留学成果を比較して考察する。
- ③各時代の状況、それによる制度の継続あるいは変化を検証する。各時代の個人や組織が持つ権力や繋がり、言語や文化の差異、経済格差、ステレオタイプや差別などの問題が関連している可能性もあるが、それをどう乗り越え、現在まで繋がってきたのかを明らかにする。また今後本制度をどのように継続していくことが期待されるかについて示唆を得る。

#### 参考文献

- 外務省, 2010, 「2010年度日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画(募集要項)」外務省 <[http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/jm\\_kk.boshu.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/jm_kk.boshu.html)> (2021年11月29日閲覧)

<sup>12</sup> Dr. Didou Aupetit Sylvie (Centro de Investigación y de Estudios Avanzados del Instituto Politécnico Nacional メキシコ国立高等調査研究センター教授) と Dr. Ramirez Bonilla Juan José (Colegio de México メキシコ大学院大学教授)

<sup>13</sup> 科学研究費 課題番号18KK0061 国際共同研究加速基金 (国際研究強化 (B)), 2018-2022年度

- 賀来景英他(編), 2002, 『21世紀の国際知的交流と日本—日米フルブライト50年を踏まえて—』中央公論新社
- 国本伊代(編・著), 2011, 『現代メキシコを知るための60章』明石書店
- 国本伊代(編・著), 2019, 『現代メキシコを知るための70章』(第2版)明石書店
- JICA, 1977, 『日墨交流計画 巡回指導報告書』国際協力事業団研修事業部
- JICA, 1980, 『日墨交流計画帰国研修員 巡回指導班 報告書』国際協力事業団研修事業部
- JICA, 2000, 「平成11年度メキシコ国別評価調査報告書」国際協力事業団企画・評価部
- JICA, 2001, 『日墨交流計画研修員 受け入れ活性化調査団報告書』国際協力事業団中南米部
- 高山智博, 2011a, 「日墨交流計画の回顧と展望」*Aguila y Sol* 第27号, 日墨交流会
- 高山智博, 2011b, 「日墨交換留学制度とその成果」国本伊代・編『現代メキシコを知るための60章』pp.278-281, 明石書店
- 滝本道生, 2001a, 「日墨交流計画(エチェベリア計画)のこれまでとこれから(上)『ラテンアメリカ時報』2001年4月号 pp.7-10, 一般社団法人ラテンアメリカ協会
- 滝本道生, 2001b, 「日墨交流計画(エチェベリア計画)のこれまでとこれから」(下)『ラテンアメリカ時報』2001年5月号 pp.23-27, 一般社団法人ラテンアメリカ協会
- 田中京子, 2004a, 「メキシコ留学が個人にもたらした影響について—日墨交流計画に参加した日本人元留学生へのアンケート調査から—」『留学生交流・指導研究』第7巻 pp.1-15, 国立大学留学生指導研究協議会
- 田中京子, 2004b, 「“INTERCAMBIO”が私たちに与えてくれたもの」*Aguila y Sol* 16号 pp.1-12, 日墨交流会
- 所康弘, 2019, 「まもなく半世紀を迎える日本・メキシコ交換留学制度」『ラテンアメリカ時報』2019年夏号 No.1427, pp.22-24, 一般社団法人ラテンアメリカ協会
- 日墨交流会, 1996, 「林屋大使, 日墨交流計画を語る」*Aguila y Sol* 第3号 pp.2-6, 日墨交流会
- 林屋栄吉, 1999, 「メキシコと私—オクタビオ・パスの思い出など—」*Aguila y Sol* 第7号, pp.2-5, 日墨交流会
- 星野晶成, 2020, 「なぜ日本の大学はASEANで留学プログラムを開発・実施するのか? —4大学の事例を通して—」『国際開発研究フォーラム』50(8), 名古屋大学大学院国際開発研究科 pp.1-20
- 横田他(編・著), 2018, 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト—大規模調査による留学の効果測定—』学文社
- Fraga Salgado Ana Fernanda (2020) “Puente entre México y Japón ¿Qué aprendieron los becarios mexicanos y cómo lo aplicaron a su regreso?: Programa de Cooperación para la Formación de Recursos Humanos en la Asociación Estratégica Global México-Japón” (Bridge between Mexico and Japan: What did the Mexican former scholars learn and how did they apply it after their return?: Program of Cooperation for the Formation of Human Resources in the Global Strategic Association Mexico Japan), Tesis de Maestría (Master Thesis), Centro de Investigación y de Estudios Avanzados del Instituto Politécnico Nacional
- Ochiai Kazuyasu (2018) “Evaluation of long-term cultural diplomacy between Mexico and Japan: research project on the former participants of the governmental bilateral student exchange program,” *International Colloquium of Mexican and Japanese Studies*, October 16-17, National Autonomous University of Mexico, Mexico City
- Peddie Francis (2022) “50 Years of the Japan-Mexico Exchange Program: Assessing the Long-term Impact Through Alumni Association Activity”. *Forum of International Development Studies* 52 (5). doi 10.18999.forids.52.5
- Uscanga Carlos (2012) “Relaciones culturales de México y Japón en la Posguerra: un análisis retrospectivo” (Cultural Relations of Mexico and Japan in the Postwar Period: an retrospective analysis), *Iberoamericana*, Vol. XXXIV, No.2
- Uscanga Carlos (2016) “Movilidad Académica en la Relación Mexicano-Japonesa en la Posguerra: Programa Especial de Intercambio para estudiantes y becarios técnicos JICA-CONACYT de 1971” (Academic Mobility in the Mexican-Japanese Relationship in the Postwar Period: Spetial Exchange Program for Students and Tecnician Scholars JICA-CONACYT of 1971), *RIMAC*, Cinvestav <<https://www.rimac.cinvestav.mx/Producción-Académica/Opiniones-de-especialistas/Movilidad-Académica-en-la-Relación-MexicanoJaponesa-en-la-Posguerra>> (2021年11月9日閲覧)